

河川環境教育支援ツール

水や河川環境を活用した

体験や諸感覚を通じた学び

幼児教育 プログラム例



Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism

国土交通省
水管理・国土保全局
河川環境課

はじめに

河川は、本物を実感・体感できる場、多様な遊びや体験活動ができる場です。流れがある、流れの音がある、冷たさを感じる、風がある、石や岩が存在する、風景がある。山から海に至る過程で姿が変化していく、四季の変化があります。多様な生き物（動物、植物）が生息しています。そしてそれらは相互に関係しています。これらのフィールドは、まさに、幼児の身近にあり、探索などで直接体験したり繰り返し働きかけたりすることができるという特徴があります。

こうした幼児の身近にあり、体験や諸感覚を通しての学びを提供することができる水・河川の学びは諸感覚を通じながら外部環境からの刺激を深めることで主体的に関わり、様々な興味関心や、環境と自分とのつながりなどの気づきや小さな発見の連続を引き起こす活動のフィールドとなり、体験を通じて試行錯誤したり考えをめぐらすなどの遊びの場を提供したり、遊びの素材自体になったりすることができます。あわせて、自然・環境に深く関わっている水・河川は、豊かな心情を育成するとともに、水固有の特性（音、形、色、手触り、動きなど）から表現の豊かさにもつながります。

本「水や河川環境を活用した幼児教育プログラム」は、多種多様な活動の例として、「園外（堤防・河原・川の中）」「園内（ビニールプールなど・砂場・園庭・ビオトープなど・園舎内）」のフィールドに分け、それぞれの環境における「遊び・活動（例）」を整理しました。

あわせて、体験を伴う活動には安全面は最重要視する必要がある、川に入る・近づくような活動においてライフジャケットを着用するなどの安全管理の基本事項についても記載しています。

本資料が、幼児教育において水や河川という恵み豊かなフィールドの更なる活用の一助となることを願っています。

INDEX

	はじめに	01
1	幼児教育のねらい	03
2	水や河川環境を活用した遊び・活動（例）	06
	（1）園外でのプログラム例	07
	● 堤防	07
	● 河原	08
	● 川の中	10
	（2）園内でのプログラム例	13
	● 水場（ビニールプールなど）	13
	● 砂場・園庭・ビオトープなど	14
	● 園舎内	17
3	具体の活動事例（タイムスケジュールや実施手順など）	18
4	河川での事故防止に関する情報	26

1. 幼児教育のねらい

1) 「幼稚園教育の基本」と水・河川とのかかわり

幼児教育の要領・指針として「幼稚園教育要領」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」、「保育所保育指針」があります。それらの要領・指針のうち、例えば、幼稚園教育要領第1章総則における「幼稚園教育の基本」や幼保連携型認定こども園教育・保育要領第1章総則における「幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本」として以下が示されています。

【幼稚園教育の基本】

幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、**環境を通して行うものであることを基本**とする。このため教師は、幼児との信頼関係を十分に築き、幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づく、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる**幼児期の教育における見方・考え**方を生かし、幼児とともによりよい教育環境を創造するように努めるものとする。

【幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本】

乳幼児期の教育及び保育は、(中略)その特性及び保護者や地域の実態を踏まえ、**環境を通して行うものであることを基本**とし、家庭や地域での生活を含めた園児の生活全体が豊かなものとなるように努めなければならない。このため保育教諭等は、園児との信頼関係を十分に築き、園児が自ら安心して身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる**幼児期の教育における見方・考え**方を生かし、その活動が豊かに展開されるよう環境を整え、園児と共によりよい教育及び保育の環境を創造するよう に努めるものとする。

上記の「基本」とされている、環境を通して行う教育、そして幼児期の教育における見方・考え方となる「幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づく、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりする」ことに照らし合わせると、園児の身近にあり、体験や諸感覚を通しての学びを提供することができる水や河川の学びは、諸感覚を通じながら外部環境からの刺激を深めることで主体的に関わり、様々な興味関心や、環境と自分とのつながりなどの気づきや小さな発見の連続を引き起こす活動のフィールド(園内、園外の身近な環境)となり、体験を通じて試行錯誤したり考えをめぐらすなどの遊びの場を提供したり、遊びの素材

自体になったりすることができます。あわせて、自然・環境に深く係わっている水・河川は、豊かな心情を育成するとともに、水固有の特性（音、形、色、手触り、動きなど）から表現の豊かさにもつながります。

2)「資質・能力」と水・河川とのかかわり

下記「幼稚園教育において育みたい資質・能力」・「幼保連携型認定こども園において育みたい資質・能力」・「保育所保育において育みたい資質・能力」に照らし合わせると、水・河川は、豊かな体験を提供できる環境（園内・園外）と言えます。その環境での体験を通じて、一例として、川や水の冷たさや流れていることを感じたり、そこらにいる様々な生き物の存在や営みについて気付いたり、四季によって河原の植物の様相が違ってくるのが分かったり、生き物を触れるようになったりします（「知識及び技能の基礎」）。

そして、水・河川に触れることにより気付いたことや、できるようになったことなどを使い、笹舟を流すなどの新たな遊びを考えたり、どこまで遠く流せるかを試したり、改良を加える等の工夫をしたり、自分の舟であることを表現したりします（「思考力、判断力、表現力等の基礎」）。

このような水・河川とその動植物に触れることにより、豊かな心情が芽生えたり、もっと工夫をしたいという意欲や、転落しないように身を守ろうとしたり友達を気かけたりする態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」といった、3つの資質・能力を一体的に育むことに貢献できる学習材と言えます。

【幼稚園教育において育みたい資質・能力】・【幼保連携型認定こども園において育みたい資質・能力】・【保育所保育において育みたい資質・能力】

- (1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- (2) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
- (3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

3)「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」と水・河川とのかかわり（例）

体験や感覚を通しての学びを提供することができる水や河川環境は、幼児教育において基本とされる「環境を通して行う」ことであるとともに、「遊びを通しての総合的な指導」と深く関連します。多様な生き物が生息し、全国どこでも身近にある水・河川の学びは、感覚を通じるこ

とによって、水が冷たい、流れが強い、キレイ、汚いなどの実感を伴った理解をもたらすことができます。

「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）」（平成 28 年 8 月文部科学省）において、幼児期の「様々な体験等を通して培われた「見方・考え方」は、小学校以降において各教科等の「見方・考え方」の基礎になるとともに、これらを統合することの基礎ともなるものである」と示されており、自然事象を多く含んでいる水・河川の学びは、発達段階に応じて、視点を変えて繰り返し関わることのできる自然の教材でもあることから、長期にわたって探究することのできる学習材となり得ます。

幼児期においてはこうした活動を通じて「幼児教育において育みたい資質・能力」が育まれている幼児の具体的な姿が「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」とされており、特に 5 歳児後半に見られるようになる姿である」と示されています。水・河川の学びは、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」に対しても、例えば以下のような貢献ができると考えられます。

(1) 健康な心と体

例) 危険な遊びや危険な箇所の理解、それらリスク等への対処方法を体感しながら学ぶ

(2) 自立心

例) 川に関係する本物の事象に触れあう中で、こどもが主体的に学ぶ

(3) 協同性

例) 友達との協力によってできることに気づく

(4) 道徳性・規範意識の芽生え

例) 川に落ちているごみに気づき、自然を守ろうとする心の育ちにつながる

(5) 社会生活との関わり

例) 社会に密接にかかわっている川や水を通じ生活との関わりに気づく

(6) 思考力の芽生え

例) 自然と関わる楽しさを感じ、本物に触れることでの気づき

(7) 自然との関わり・生命尊重

例) 生き物の飼育を通して命の大切さに気づき、自分の命についても考える

(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

例) 水辺の植物の様相や生き物の体形など、多様な形に気づく

(9) 言葉による伝え合い

例) 体験から得た様々な気づきは積極的に友達と共有したいと思うようになる

(10) 豊かな感性と表現

例) 川や水遊びを通じて、自然の法則や自然の雄大さを感じる

2. 水や河川環境を活用した遊び・活動（例）

幼児教育において、水・河川を対象として活動を行っている様々な園の事例を分析し、多種多様な「水・河川の提供する環境及びその環境を活用した遊び・活動」の具体の例として、「園外（堤防・河原・川の中）」・「園内（ビニールプール・砂場など・園庭・園舎内）」のフィールドに大別し、それぞれの環境における「遊び・活動（例）」を整理しました。

環境	遊び・活動
園外	堤防 ①土手のそりすべり
	河原 ②河原の石や流木で遊ぶ ③川の自然観察 ④河原の生き物観察（昆虫、野鳥など）
	川の中 ⑤川に入る・浮かぶ・流れる・歩く ⑥水中の生き物観察（魚、水生生物など）
園内	ビニールプールなど ⑦ビニールプール等での水遊び
	砂場・園庭・ビオトープなど ⑧砂場遊び ⑨水を使った工作や遊び（水鉄砲遊びなど） ⑩雨の日の園庭観察（水たまりができる、植物が生き生きする） ⑪雪遊び（氷柱や雪をつかった遊び、日なたと日陰での溶け方等）
	園舎内 ⑫水槽内での飼育・観察

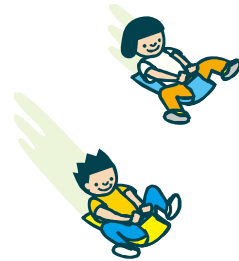
【注】体験を伴う活動において、安全面は最重要項目です。川（水）に入る・近づく活動ではライフジャケットを着用するなどの最低限の安全管理を行うことに留意する必要があります。

園外でのプログラム例

堤防

①土手のそりすべり

- ・段ボールやそりなどを使えば、堤防は巨大な滑り台に。冬場のスキー場に行かなくても、大きな川の下流などの堤防では季節を問わずそり滑りを楽しむことができます。
- ・繰り返すことで、段々とコツをつかみ、より速くすべろうと工夫します。手製の段ボールそりであれば形状や持ち方や姿勢、プラスチック製のそりであれば座る場所やヒモなどの持ち方や姿勢など、自ら試行錯誤を繰り返しながら斜面における物体の移動の原理について、遊びながら感覚的につかむことができます。（例えば、段ボールそりの底にビニール素材を追加するなどの工夫をして摩擦抵抗を減らそうとしたり、土手の勾配に対して、自身の体の傾きを変えたりして体重の乗せかたを変えることですべりやすくすることができます。）



【環境構成（◆）と教員の援助（○）】

- ◆ そりすべりに必要な素材や道具を用意する（以下、例）
 - ・段ボールで作成したそり、またはプラスチック製のそり
（段ボールそりの場合は、滑りやすくするために底にビニール素材等を貼り合わせる、段ボールを重ねて貼り合わせる、等の工夫をする）
 - ・ヘルメット・軍手・長ズボンなど
- 草丈の長さや草の種類によっても滑りやすさが異なることに気付くように働きかける
- （同じ条件では）重いほど滑りやすいことに気付くように働きかける
- 滑りにくい場合は、段ボール等をつなげて斜面に敷くなど、友達と話しあう中で様々なアイデアがでるような環境づくりをする

【水難事故防止 …川（水）に入る・近づくことに対する配慮事項】

- ・堤防と川（流路）との距離が短い場合があります。滑りすぎて川へ転落する等のリスクを予見して、安全対策を講じる必要があります。
- ・特に雪が積もった場合のそりすべりは予想以上にすべる可能性があり、滑った先の転落等に対する注意が必要です。

河原

②河原の石や流木で遊ぶ

- ・河原には場所によって大小さまざまな石や色とりどりの石があります。様々な形の石を空き箱に隙間なく敷き詰めて自然のパズルを楽しんだり、卵の空パック等に似た色の石を集めて「宝石探し」のようにコレクションし、わずかな色の違いを見比べたりすることができます。
- ・石の形に応じて、絵の具で色を塗るなどのストーンペインティングも幼児の想像力を掻き立てます。その他にも石を用いた基地づくり（ダム等）、複数の石を積み上げるバランスアート等の遊びもできます。
- ・また、河原では様々なユニークな形状の流木を見つけられ、動物などの形を連想したオブジェを作成することもできます。

【環境構成（◆）と教員の援助（○）】

- ◆ 河原の石や流木で遊ぶ際に必要な素材や道具を用意する（以下、例）

- ・パズル用の固い紙箱（自然のパズル）
- ・卵のパック等やその代替品（カラーストーンコレクション）
- ・絵の具など（ストーンペインティング）
- ・ライフジャケット
- ・軍手など
- 石によっても丸かったり・角ばったりしていることに気付くように働きかける
- 自然物の色や模様のわずかな違いに気付くように働きかける
- 石や流木はどこからやってきたのかに目を向けるように働きかける

【水難事故防止 …川（水）に入る・近づくことに対する配慮事項】

- ・河原などでも落水の危険があります。後述の「3.具体の活動事例（タイムスケジュールや実施手順など）」や「4.河川での事故防止に関する情報」に記載されている安全配慮事項等を参照しながら、活動内容や活動場所に応じた活動計画を立てる必要があります。

③川の自然観察

- ・川には自然が織りなす風景、四季の変化、川の流れの様子や音・色・匂いなど様々な発見の要素があります。同じ場所でも川の水位や流れの速さ・流れが生み出す音などの様子も異なります。春には桜の花、秋には紅葉が川の水面に映り込んでいたり、様々な形の落ち葉が積もったり流れに浮かんでいることもあります。
- ・新芽が出る、花が咲く、葉を落とすなど、時期によって植物の種類や状態が異なります。自然を観察することで、毎回新たな発見に出会うことができます。こうした川の様相を記録したり、絵や言葉などで表現したりすることで、自身の感覚を使って観察した事項をより具体的に認知することができます。

【環境構成（◆）と教員の援助（○）】

- ◆ 川の自然観察を行う際に必要な素材や道具を用意する（以下、例）
 - ・観察したものを記録する（写真や動画など）
 - ・画用紙や色鉛筆など、見たもの、聞いたものを表現するもの（絵や言葉など）
 - ・ライフジャケット
- 四季に応じた環境の特徴や変化に気付くように働きかける
- 川の流れの様子や音・色・匂いなどの要素に気付くように働きかける
- 聞いた音を擬態語で表したり、気づいたりしたことを友達と話しあう中で新たな気づきが得られるような環境づくりをする

【水難事故防止 …川（水）に入る・近づくことに対する配慮事項】

- ・河原などでも落水の危険があります。後述の「3.具体の活動事例（タイムスケジュールや実施手順など）」や「4.河川での事故防止に関する情報」に記載されている安全配慮事項等を参照しながら、活動内容や活動場所に応じた活動計画を立てる必要があります。

④河原の生き物観察（昆虫、野鳥など）

- ・河原の草むら、石の裏、樹木の幹などには様々な虫が潜んでいたり、樹木では野鳥が羽を休ませていたりし、わずかに周りを見渡すだけでも様々な生き物に出会うことができます。
- ・大きなものやちいさなもの、速く動くもの遅いもの、こうした動的な動きを見せる生き物等の観察は幼児の興味を引き付ける活動です。



- ・こうした生き物の動きや様相を記録したり、絵や言葉などで表現したりすることで、自身の感覚を使って観察した事項をより具体的に認知することができます。

【環境構成（◆）と教員の援助（○）】

- ◆ 河原の生き物観察を行う際に必要な素材や道具を用意する（以下、例）
 - ・ 観察した生き物を記録する（写真や動画など）
 - ・ 望遠鏡など
 - ・ 画用紙や色鉛筆など、見たもの、聞いたものを表現するもの（絵や言葉など）
 - ・ ライフジャケット
- 河原の生き物のいた場所や、色や大きさなどに気付くように働きかける
- 河原の生き物がどんなものを餌にしているかについて考えるように働きかける
- 聞いた音を擬態語で表したり、気づいたりしたことを友達と話しあう中で新たな気づきが得られるような環境づくりをする

【水難事故防止 …川（水）に入る・近づくことに対する配慮事項】

- ・ 河原などでも落水の危険があります。後述の「3.具体の活動事例（タイムスケジュールや実施手順など）」や「4.河川での事故防止に関する情報」に記載されている安全配慮事項等を参照しながら、活動内容や活動場所に応じた活動計画を立てる必要があります。

川の中

⑤川に入る・浮かぶ・流れる

- ・ 川には流れがあり、プールとは異なる環境です。水に触れたり、緩やかな川の流れに身を任せたり。ライフジャケットを着ることでこうした体験ができ、川の特徴や楽しさや危険に対する身の守り方を身体で感じながら学ぶことができます。
- ・ 川には流れの速いところやゆるやかなところ、浅いところや深いところがあります。
- ・ できるだけ流れがゆるやかで危険の少ない場所を探しましょう。



【環境構成（◆）と教員の援助（○）】

- ◆ 「川に入る・浮かぶ・流れる」を行う際に必要な素材や道具を用意する（以下、例）
 - ・ライフジャケット
- プールと川の違いや、浮いたときの水の感触などに気付くように働きかける
- 足を下流に向け、ゆっくりと流れることで景色を見渡せるに気付くように働きかける
- （川に入ることを感じる）川の冷たさや、流れの強さ、透明度などを友達と話しあう中で新たな気づきが得られるような環境づくりをする

【水難事故防止 …川（水）に入る・近づくことに対する配慮事項】

- ・ 川の中の活動では川での自然体験に関する資格を有した専門家の協力を得たりして、後述の「3.具体の活動事例（タイムスケジュールや実施手順など）」や「4.河川での事故防止に関する情報」に記載されている安全配慮事項等を参照しながら、活動内容や活動場所に応じた活動計画を立てる必要があります。

⑥水中の生き物観察（魚、水生生物など）

- ・ 川は生き物の宝庫です。魚以外にもカワゲラやトビケラなどの小さな水生生物が無数にいます。一見生き物がいないように見えても浅場の石をひっくり返すと小さな水生生物が石の裏にはりついていたりします。
- ・ 川で手持ちの網を使って、小さな魚を捕まえようとはしますが、水の中の魚は簡単には捕まりません。「ガサガサ」などのやりかたで、複数人で工夫をすることで苦労しながらようやく魚を捕まえることができます。そして捕まえた魚を触ったり鑑賞したりすることで、生物への興味が高まります。



※「ガサガサ」とは草むらや石の下などにいる生き物を足で「ガサガサ」と脅かして網に追い込む生き物のとりかたです。（小学校では、とれた水生生物の種類や数によってその川の水質を判定する「水生生物調査」も人気です）※事前に漁業協同組合や河川管理者などの関係機関に連絡を入れ、活動予定の報告をして了解を得ておく必要がある場合があります。

（【注】漁業権が設定されている川では「遊漁承認証（遊漁券）」が必要な場合があります。

【環境構成（◆）と教員の援助（○）】

- ◆ 水中の生き物観察を行う際に必要な素材や道具を用意する（以下、例）
 - ・ 箱めがね（手作りなど）
 - ・ 小さな網（たも網など）
 - ・ アクリルボックスなどの簡易水槽
 - ・ ライフジャケット
- 見つけた生き物はどんな場所にいたかについて気付くように働きかける
- 見つけた生き物について、大きさ、数、動き方、雌雄による模様の違いなどに気付くように働きかける
- 生き物は必ずしも捕まえる必要はなく、手作りの箱めがねで水中の様子を観察したりして気づきが得られるような環境づくりをする

【水難事故防止 …川（水）に入る・近づくことに対する配慮事項】

- ・ 川の中の活動では川での自然体験に関する資格を有した専門家の協力を得たりし、後述の「3.具体の活動事例（タイムスケジュールや実施手順など）」や「4.河川での事故防止に関する情報」に記載されている安全配慮事項等を参照しながら、活動内容や活動場所に応じた活動計画を立てる必要があります。



写真提供：ラ・フェリーチェ保育園

園内でのプログラム例

水場（ビニールプールなど）

⑦ビニールプール等での水遊び

- ・ビニールプール等の水場における水遊びを通じ、以下のことに気がつくことができます。
水の性質（冷たい、浮かぶ）
陸上とは体の動かし方が違う（水の中では動きにくい）
水の中では呼吸ができない
- ・手で水を押ししたりして波を作ったり、複数人でビニールプール内を同じ方向に進んだりして水流を作ったりできます。また、ビニールプール内に水を多く入れ体を揺らすと、水が大きく揺れ動き体が浮くことに気付くなど、水のボリュームや力を感じる活動もできます。
- ・ほかにも浅いプールでのいかだづくり（段ボールやペットボトル等の浮力体を用いた工夫）で工夫して浮かばせたり、乗ってみたりなど、様々な遊びを通じて水の不思議を感じることができます。

【環境構成（◆）と教員の援助（○）】

- ◆ ビニールプール等での水遊びを行う際に必要な素材や道具を用意する（以下、例）
 - ・ ビニールプール
 - ・ 浮かばせるもの（小さなものや大型のものなど）
 - ・ ライフジャケット等の浮力補助具
- 水の感触や、陸上との違いに気付くように働きかける
- 水を押ししたり、ぐるぐるまわしたりすることで波や流れをつくれることに気付くように働きかける
- （水に入ることを感じる）水の冷たさや浮遊感覚、動きの違い、水を使った新たな遊び方などを友達と話しあう中で新たな気づきが得られるような環境づくりをする

【水難事故防止 …水に入ることにに対する配慮事項】

- ・ビニールプールなどのわずかな水位でも溺水のリスクがあります。プールや水遊びのリスクについて示された各種資料や指針を踏まえた対策が必要です。
- ・例えば、「幼児期の運動に関する指導参考資料〔ガイドブック〕第1集」（H27.3 文部科学省）の「体を動かす遊び中の事故事例と対策」として以下が整理されています。

【水遊びにおける幼児の特性とリスク】

- 幼児は頭が大きく重たいため、転倒しやすい
- 腕力が弱いため、体を支えたり起き上がったたりすることが難しい
- うつぶせになった場合、鼻と口が水没して溺れることがある
- 対処能力が未発達で、気管内に水が入るともがくことなく溺れることがある
- 小さいプールは幼児が密集して、倒れたときに発見が難しい場合がある

砂場・園庭・ビオトープなど

⑧砂場遊び

- ・砂場では、砂と水を使った遊びを通じ、以下のことに気づくことができます。
砂は乾燥するとサラサラだが、水を少し含めると形作ることができるようになる。…砂像をつくる、泥団子をつくる（水は砂や土をくっつける、乾ききるとまた崩れる）
手についた砂や泥はなかなか取れないが、水では比較的簡単に洗い流すことができる
- ・また、砂山をつくって水を流すことで、水は地面を削ったり、砂山の上の高い場所から低い場所へと流れたりします。
- ・砂場の砂では基本的に水はしみこみます。多量の水を流しても一時的に水はたまるものの、やがて地面へとしみ込んでいきます。しみこませないための工夫として、タライなどの容器を用いたり、切り開いた牛乳パックを掘った川底に長く敷き詰めたりする（しみ込まないようにする）ことで湖や川を砂場で再現することができます。
- ・また、砂山遊びをする際、子どもたちは水によって土が削られないように土を盛り上げたり、大きな石を並べてみたり、あふれないようにしないようにしている姿が見られます。こうした様子を踏まえ、ミニチュアの家や鉄橋などを砂場に加えたり、川沿いに堤防のような盛り土をつくったりしながら、川に多量の水を流すことで水があふれる様子などを発展的に遊びの延長として取り入れることもできます。

【環境構成（◆）と教員の援助（○）】

- ◆ 砂場遊びを行う際に必要な素材や道具を用意する（以下、例）
 - ・ 一般的な砂場セット（スコップやバケツなど）
 - ・ 浅めのタライ（湖を再現する）
 - ・ 切り開いた牛乳パック（「川底」へ水がしみ込まないようにする）
 - ・ ミニチュアの家や鉄橋などのおもちゃ（ジオラマ用）
- 乾いている砂でも、水を加えることで形が作れることに気付くように働きかける
- 砂場の水がしみこまないようにする方法について気付くように働きかける
- 砂山や堤防など砂でつくったものに、水を流すなど、幼児が繰り返し試したり工夫したりしながら考えるような環境づくりをする

⑨水を使った工作や遊び（水鉄砲遊びなど）

- ・ 園庭などでの水を使った工作や遊びを通じ、以下のことに気づくことができます。
 細い穴から水が勢いよく飛ぶ（食器用洗剤の空容器を用いた水鉄砲）
 傾きが大きいと速く流れる（開いて切った牛乳パックをつなぎ、傾け、水を流してみる）
- ・ ほかに、ペットボトルじょうろなどをつくったり、身近な素材を用いて様々な遊びをしたりすることができます。
- ・ あわせて、水車を回して水流をつくったり運河などの仕組みを学んだりするような市販の知育道具なども存在します。



【環境構成（◆）と教員の援助（○）】

- ◆ 水を使った工作や遊びを行う際に必要な素材や道具を用意する（以下、例）
 - ・ 食器用洗剤の容器（空にしてよく洗浄したもの）
 - ・ 牛乳パック（複数の牛乳パックを切り開いてつなげる）
 - ・ その他の水を使って遊ぶおもちゃ
- 水をより遠くまで飛ばす工夫（水を十分に入れる・容器を強く押す等）などに気付くように働きかける（ホースの先端を絞ると勢いよく散水される）
- つないだ牛乳パックの傾きを大きくしたり、長くつないだりして水が速く遠くまで水が運べるようにするなど、友達と話しあう中で様々なアイデアがでるような環境づくりをする

⑩雨の日の園庭観察（水たまりができる、植物が生き生きする）

- ・雨の日は、植物にとって水の恵みを得られる絶好のチャンスです。植物は水滴を全身にまとうことで、生き生きとしているように見えます。花壇やビオトープなどでこうした様子を観察したり、その様子を表現することで、幼児に豊かな心情が芽生えさせたりします。
- ・傘を差しながら園庭に出ることで、降ってくる雨粒の音を聞いたり、地面に水がたまったりする様子や斜面に沿って水が流れていく様子などを見ることができます。

【環境構成（◆）と教員の援助（○）】

- ◆ 雨の日の園庭観察を行う際に必要な素材や道具を用意する（以下、例）
 - ・ 雨傘や雨合羽
- 雨の日は外遊びが出来ないかわりに、植物にとっては待ちに待った日であることに気付くように働きかける
- 雨の日の園庭での雨の音や土のにおいなどに気付くように働きかける
- 聞いた雨音を擬態語で表したり、植物の様子や地面の様子等を観察して気づいたりしたことを友達と話しあう中でまた新たな気づきが得られるような環境づくりをする

⑪雪遊び（氷柱や雪をつかった遊び、日なたと日陰での溶け方等）

- ・(地域により)冬には氷柱や雪をつかった遊びを通じて、以下のことに気づくことができます。
 - 氷や雪を触ると冷たく、触っていると溶けて水になる（雪遊び）
 - 水では形をつくることができないが、雪は形を整えることができ、遠くまで投げられる（雪だるまづくりや雪合戦）
- ・日陰に比べ日なたに置いた雪だるまの方が先に溶け出すなどの不思議さに気付いたりする。
- ・砂場の砂とは感触が違ったり、雪を強く握ると氷のようになり、より遠くまで投げられるようになるなどの発見につながる。

【環境構成（◆）と教員の援助（○）】

- ◆ 雪遊びを行う際に必要な素材や道具を用意する（以下、例）
 - ・ スコップやバケツ
 - ・ 手袋（しもやけを防止するため）
- 雪の感触や冷たさなどに気付くように働きかける
- 雪だるまを置いた場所（日なた・日陰）によって溶け方が違うことに気付くように働きかける。

園舎内

⑫水槽内での飼育・観察

- ・水槽の生き物の世話をするなかで、餌を多くあげすぎたり、水が汚れすぎたりしても生き物にとっては好ましくないことなどに気付くことで、餌の適切な量や水の状態などを観察しながら自ら工夫して行動するようになります。
- ・水槽の生き物には適正な水温や酸素が必要であることなど、どのような環境であれば生き物が長く生きていられるかについて考えたり、生き物に命があることについて考えたりすることにより心が動かされ、命の大切さに気づくなど、身近な生き物を通じて自分の命についても考えることができます。
- ・外来種（魚や植物など）の扱いに注意することも必要です、（野外に逃がさないなど）

【環境構成（◆）と教員の援助（○）】

- ◆ 水槽内での飼育・観察を行う際に必要な素材や道具を用意する（以下、例）
 - ・水槽（温度管理・照明等設置）
 - ・ろ過フィルター（水質改善と酸素供給）
 - ・カルキ抜き
 - ・その他水槽での飼育に必要なもの
- 水槽内の生き物に適した環境（水温・光・酸素など）に気付くように働きかける
- 水槽内の生き物の飼育に必要なこと（餌やり・水の入れ替え）がなぜ必要かについて気付くように働きかける
- きちんとみんなで飼育するために必要な作業等や飼育をしながら気が付いたことを話し合ったりできるような環境づくりをする

3. 具体プログラム（例）

川での自然体験活動

【川の中・河原など】

幼児教育の基本とされている、環境を通して行う教育、そして幼児期の教育における見方・考え方となる「幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づく、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりする」ことに照らし合わせると、河川環境に直接触れる自然体験活動を通じての学びは外部環境からの刺激を深めることで主体的に関わり、様々な興味関心や、環境と自分とのつながりなどの気づきや小さな発見の連続を引き起こすことが可能と考えられます。ここでは川での自然体験活動における具体プログラム(例)を紹介します。

【想定】

クラス： 5歳児クラス

人数： 幼児 20 人 保育士 4 名

安全管理責任者： 園長または主任

現場安全管理者： 川の指導者資格を有した保育士または外部指導者 5 名

【ねらい】

- ・ 水に触れるという感性を育む
- ・ 川遊びの楽しさ、危険なことを知る
- ・ 様々な動植物が生息していることを知る
- ・ 水の基礎的な特性・水に起因する事象を感覚的に感じる

【主な活動内容】

- ・ 川に入り、水の流れを感じる。
- ・ いきもの等を観察する。

【予想されるこどもの様子】

- ・ 川の流れ、足元や足がつかないことによる不安定さを怖がるこどもがいる。
- ・ 様々な動植物に興味を示す
- ・ 全身で川遊びを楽しむ姿が見られる

プログラム／タイムスケジュール例

時間	項目	担当	備考
10:30～ 5分 10:35	挨拶	スタッフ一同	事前にトイレの確認 参加者の様子を確認（服装確認含む）
10:35～ 5分 10:40	セーフティ・トーク ・体調に関わること（暑い、寒い） ・怪我に関すること（滑る、転ぶ）	インストラクター	
10:40～ 10分 10:50	楽しく遊ぶための準備 ・ライフジャケット着用・確認	全員	履物の再確認
10:50～ 15分 11:05	川へ移動、水慣れ、ラッコのポーズ	インストラクター グループ 補助講師 バックアップ	流れのない場所 ラッコはその場で説明
11:05～ 20分 11:25	川の流れ体験（または渡渉）	スタート 補助講師 ゴール バックアップ	適当な場所 右岸から左岸へ 教員のサポート
11:25～ 10分 11:35	川の生き物探しの説明	インストラクター	道具準備
11:35～ 20分 11:55	川の生き物探し（ガサガサ）	インストラクター グループ 補助講師 バックアップ	箱メガネ 教員のサポート
11:55～ 10分 12:05	解説		
12:05～ 20分 12:25	渡渉（または川の流れ体験）	スタート 付添い 補助講師 バックアップ	左岸から右岸へ スクラム組むか単 独か 教員のサポート
12:25～ 5分 12:30	挨拶	スタッフ一同	
計	120分		

服装、持ち物

【幼児・スタッフ】

- ☐ 水にぬれても良い恰好（水着等）
- ☐ 長ズボン
- ☐ 上着（ラッシュガード等、長袖推奨） ※下着の上に長ズボンと上着を着用、長ズボンと上着については綿ではなく科学繊維の素材
- ☐ 濡れても良い運動靴 （リバーシューズ等 ※マジックテープのものは剥がれやすい）
- ☐ 濡れても良い靴下 （靴の下に着用、砂利などで痛むことを予防する）
- ☐ 熱中症対策用の帽子
- ☐ ゴーグルまたは水中めがね
- ☐ 大きめのタオル
- ☐ 水筒

【全体に必要な資機材など（例）】

項目	数	備考
☐ ライフジャケット子ども用	人数分＋予備	低学年用（鉄片試験浮力 5.0kg 以上）
☐ ライフジャケット大人用	人数分＋予備	浮力（鉄片試験浮力 7.5kg 以上） ※緩やかなエリアであれば 5.85kg 以上
☐ ブルーシート	2	ライフジャケット等置場
☐ 救急セット	1	簡易セット
☐ スローロープ	指導者分	個人装備
☐ 川の生き物探し用機材	3	バケツ等
☐ 川の生き物探し用機材	一式	観察用ケース
☐ 雑巾	10 枚	

活動配置例

- ・水中・水上、水際（高水敷）での活動時に、ライフジャケットを着用したスタッフをしかるべきポジションに配置する。
- ・配置図は予め作成し、当日の全スタッフで共有する。
- ・流水の中での実施では参加者約 7～10 名につき 1 人の指導者（川の安全指導に関する有資格者）を下記①～③スタッフのとして配置する。

①スポッター（上流側で危険回避する見張り役）

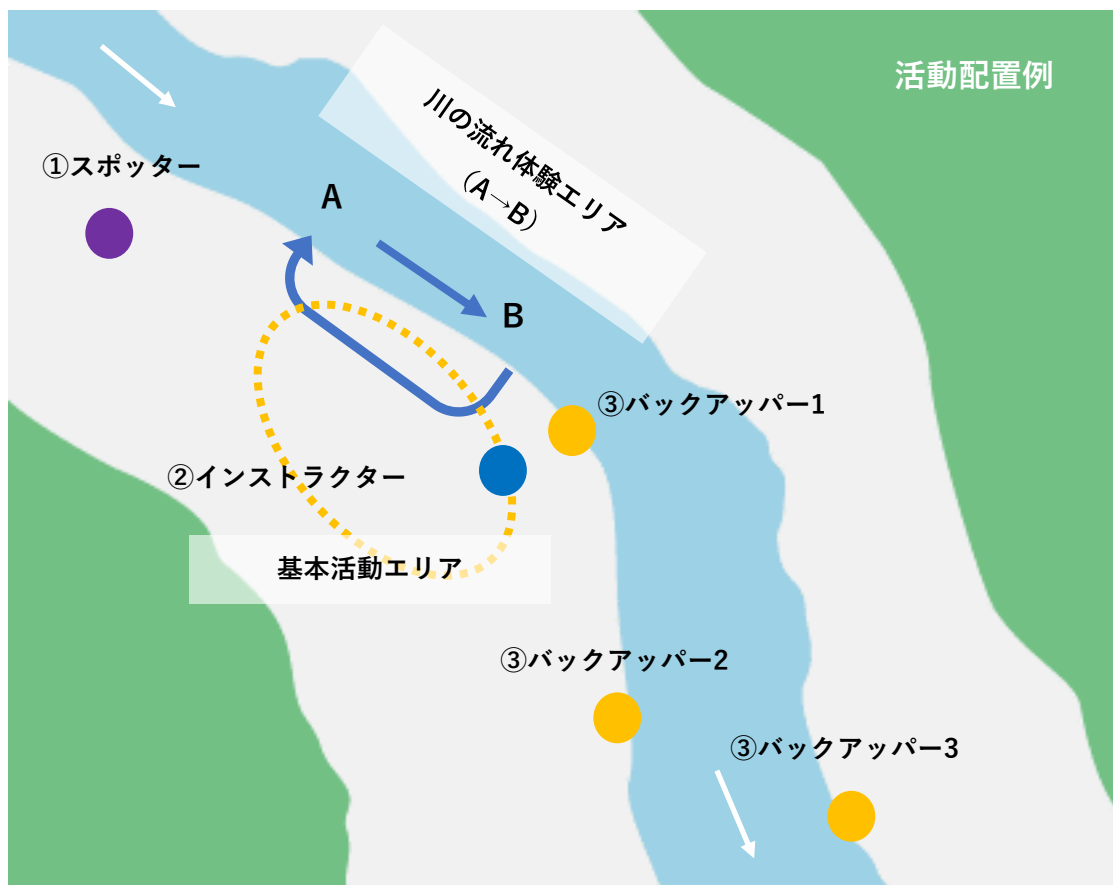
- ・流れのあるところでは、上流から流木等が流れてきたり、船やボートなど他の利用者も上流から下ってくることがある。上流側にはそのようなものが近づいてこないか常に監視し、安全管理責任者や参加者に連絡する者（スポッター）を配置する。

②インストラクター

- ・全体を見渡せて且つ全ての指導者から見えるところに位置する。（川専用のホイッスルを鳴らしたり、ハンドサインを送ったりするなど、他の指導者に指示する時には、活動の中心部に全体を監視し指示をする司令塔役のインストラクターを置くことが必要）

③バックアップパー（下流側で危険回避する役）

- ・川など自然体験では自助（セルフレスキュー）を基本としているが、自力で岸に戻れなくなった（なりそうな）人などを救助する為に、下流に配置する複数の者をバックアップパー（バックアップ）と言い、常時救助できる体制でいることが求められる。



プログラム詳細／指導者確認事項

①セーフティ・トーク

- ・活動にあたっての注意事項を伝えます。対象者を勘案し、熱中症や低体温症、河原の石や苔などでの転倒など、すべてのプログラムに共通したポイントに絞って伝えます。
 - ・プログラム毎に注意事項や活動内容について伝えます。
- ※挨拶の時間を含め、園児の様子と服装（特に履き物）の確認を行います。

②ライフジャケット着用確認

- ・ライフジャケットを着る理由、着用方法の確認を行います。
- ※正しく着用できているか、ライフジャケットがずりあがらないか等のチェックを必ず指導者が行います。

③移動

- ・動線の確認を行います。
- ※園児の行動への配慮・観察を行います。
- ※バックアップを配置します

④水慣れ

- ・水温の確認を行い、水に対して慣れます。あわせて水辺と水中の石が滑ることへの注意喚起を行います。
- ※例として、「活動配置例」のAエリアにて実施することを想定。当日の状況によっては流れが強くなる可能性があるため、水に入る人数のコントロールを行います。
- ・流された際の漂流姿勢（ホワイウォーターフローティングポジション）の説明を行います。
- ※浮くと流れの影響をより一層受けることに注意します

⑤川の流れ体験

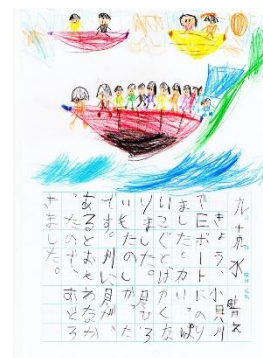
- ・川の流れ体験：川の流れを感じ、ライフジャケットの重要性を知るプログラム
- ※例として、「活動配置例」のAーB間にて行うことを想定。スポッターは上流側を確認し、インストラクターに合図を送ります。A地点から一人ずつ川の流れ体験が実施できるよう、インストラクターが各スタッフへ合図を送ります。B地点には教員を配置し、B地点に到達した児童を陸側へと誘導します。

⑥生き物探し（ガサガサ）

- ・どこに、どのような生き物がいるかを調べます。
- ・生き物の種類の説明に重点を置かず、当該生物と河川環境とのかかわりに着目します（浅い場所にいる、流れの緩やかな場所にいる、等）。

⑦体験後の挨拶

- ・感じたことを言葉にして表現します。
- ※返答が言語化しやすい問いかけをします。



効果

資料提供：ラ・フェリーチェ保育園

川での自然体験活動が、「幼児教育において育みたい資質・能力」に対してどのような影響を及ぼすかを、活動中の発話や活動後の絵日記等の形式知から読み解くことも効果的です。

以下、参考例として 2023 年に多摩川（東京都・青梅市）にて保育園児を対象に川の流れ体験等を実施した際の幼児の反応を示します。

【状況・プログラム】

- ・上流域において、インストラクターの指導の下、以下の活動を行った。（気温：やや低）
- ①準備運動（ライフジャケットを着用して浅場で浮く練習）
- ②川の流れ体験（ライフジャケットを着用して、一部の園児が川の流れ体験を実施）
- ③生きもの探し（河原内の水たまり部分での生きもの探しを実施）

【反応】

幼児の発言と、「幼児期の終わりに育って欲しい姿」との関連（例）

活動	幼児の発言	カテゴリー	「幼児期の終わりに育って欲しい姿」との関連（例）
①準備運動（浅場で浮く練習）	・さむい	水温に対する反応	(10) 豊かな感性と表現
	・つめたい		
	・めっちゃ、ずずしい		
	・やばい、つめたい		
	・ぬれた	実際に入水した際の感触	(1) 健康な心と体 (10) 豊かな感性と表現
	・ういている	（ライフジャケット着用の際の）入水した状態への反応	
	・こわい	入水に際しての心理反応	
	・うかぶけどさむい	入水した状態への反応・水温に対する反応	
	・ふかい	入水場所の地形、環境（水深）についての観察	

	・さかなつかまえよう、いやいな い、まだ	川の生き物の生息地への理 解（浅瀬にいない）	(2) 自立心 (6) 思考力の芽生え (9) 言葉による伝え合い
	・あみがないと（生き物が）つか まえられる	川の生き物の補足に必要な 道具への理解	
	・さかながいた	ライフジャケット着用の際 の姿勢についての洞察	
	・（両手の）手でこうしないと おぼれるよね？		
②川の 流れ体験	・滑るから、ゆっくり歩く	河川（水際）での安全意識、 移動についての理解	(1) 健康な心と体 (2) 自立心
	・はやい	川の流れに対する反応	(1) 健康な心と体 (10) 豊かな感性と表現
	・こわい	川への危機感、恐怖心	(1) 健康な心と体
	・ながれたくない		
	・やってみる	川の流れ体験に対しての積 極性、参加意欲	(2) 自立心
	・さむい	川への危機感、恐怖心	(1) 健康な心と体 (10) 豊かな感性と表現
	・（おもったより）ふかい	水温、体感温度への反応	(10) 豊かな感性と表現
③生きもの の探し	・こわい（いわ登り）	恐怖心	(1) 健康な心と体
	・アメンボがいた	生き物の発見	(6) 思考力の芽生え (7) 自然との関わり・生命尊重 (9) 言葉による伝え合い
	・おたまじゃくしいた		
	・さかないっぱい		
	・虫みつけた		
	・この辺動いた（小石の間）		
	・おたまじゃくしいた		
	・えびつかまえた	生き物の捕捉	(2) 自立心 (7) 自然との関わり・生命尊重 (9) 言葉による伝え合い
	・えびを手でさわった	生き物の触感	(2) 自立心 (6) 思考力の芽生え (7) 自然との関わり・生命尊重 (10) 豊かな感性と表現
	・石があったかい（いわ登り）	川以外の環境への洞察	
	・（岩に）水をかけると、色が つく		
	・あたたかい（体温低下によりひ なたぼっこへ移行した児童）	川以外の環境への洞察、体 感温度への反応	

【効果に関する主な声（幼児教育を支援する川の指導者からの声）】

プログラムの効果測定の方法

- ・指導者がヘルメットに固定したカメラを用い動画を常時撮影し、その中から園児の発した言葉を抽出する。
 - ・園より、絵日記等を作成したものや事後の様子等の感想を頂き、効果測定を行う。
 - ・園に戻って絵日記を描く園や絵を描く園など様々な方法が考えられる
 - ・保育士からの聞き取りを都度行っている。（体験時、体験後、打合せ時）
 - ・（小学校や児童クラブ等と比べて）感想文ではなく絵日記をいただく
 - ・こどもの感想
 - ・こどもの変化（複数回活動があるときに把握する）
-

プログラム実施後に変化があった実際の内容、感想

- ・流れを見て川流れを躊躇した子どもが、一度はやめたものの最後に思い切って流れることができるようになった。躊躇せず流れられた子どもでも、緊張から笑顔への表情の変化があったので、感情が大きく動かされているのが見て取れた。
 - ・河原に寝そべり石を抱えて、冷えた身体を温めている時も終始笑顔でいて、今を楽しんでいる様子だった。
 - ・翌年の親子対象川遊びイベントにリピーターとして参加していると効果を感じる
 - ・きれいな川でプカプカ浮かぶ体験に教員自身が感動するという意見があった
 - ・干潟の生き物観察後は大体の子どもがカニ取り名人になっている。主観ではあるが、集中力や観察力は向上していると思う。子ども達の目の輝きを見ると感性が豊かになり、生き物が好きになることで、自然や川に対する愛着の心が醸成されているのではないかと感じる。
 - ・網を使って水生生物を捕まえられるようになった
 - ・保護者も参加するカヌー活動では、保護者の感想や子ども達の普段の様子との違いや変化の声を聞くことが多い
-

4. 河川での事故防止に関する情報

マニュアル作成について（参考例）

①事前準備

【実施場所の選定】

- ・外部講師、安全管理責任者との協議のうえ、実施内容や参加者の状態を考慮し選定します。

【実施場所の下見方法（事前踏査）】

- ・事前に実施予定よりも広いエリアのリスク確認を行います。
危険物がある場合は、場所を再設定します。手付かずの自然環境の場所ではなく、ある程度管理されていて、常にこども全員を見渡すことができるなど視界が開けている場所が活動に適しています。
- ・特に自然体験を水中・水上で実施する際には、川底の状況を水面上若しくは水中から目視し、安全性が確保できた上で、予定する実施内容と同じ行動を行います。事前踏査は基本的に有資格者等の複数人（ライフジャケット着用）で行い、安全確保に努めます。
- ・踏査の日が荒天の場合には、日を改めて実施します。
- ・踏査した際に見た危険箇所や実施場所は、写真を撮影しレポート等を作成してとりまとめ、当日の全スタッフがその情報を共有します。
- ・実施予定範囲よりも広いエリアに内在するリスクを予見・抽出します。想定される事故等の発生を防止するための対策を検討し、実施内容や場所の選定、必要な資機材を準備します。
- ・踏査の際には天候、水温、水深、流速、川底の様子等の基本情報の他、予測される不確定要素等についても洗い出します。
- ・安全を確保の上、参加者の満足度を高めるためのアイデアについても共有します。
- ・参加者・スタッフの装備（準備物）水中・水上および水際（陸地と水面との境目から 3～5m の陸地側の範囲）で実施する場合は、原則として②の装備を準備または参加者・スタッフへ持参を周知します。

【活動当日の下見】

- ・事前下見と同程度の下見を当日にも行い、事前下見で得た状況と変化が無いか確認します。

②参加者・スタッフの装備（準備物）

・ライフジャケット：

「川の中」で活動の場合には固型式のライフジャケットが必要です。「水際」で活動を行う場合には足場や柵の有無・実施内容に合わせて固型式または膨張式のライフジャケットを用意します。また年齢や体の大きさも考慮し、子ども・幼児は股下ベルトを有するタイプを用意します。

・乾きやすい服（上下）：

速乾性に優れた水着や化学繊維でできたウェアを用意します。

・シューズ：

かかとを固定できる滑りにくいサンダルや運動靴を用意します。脱げやすい樹脂製サンダル等は不可。

・ヘルメット：

実施内容や場所を考慮し、川での活動に適したもの（水抜き穴等のあるもの）を用意します。

・スローバック：

スローバックは水に浮く救助用のロープが入っており、漂流する人を陸上や安定したボートの上から救助する道具です。扱うにはスキルが必要であるため、スタッフのみ装備します。（スローロープとも呼びます）

・その他実施に必要な基本的な資機材一覧は、別紙 1 を参照ください。

③中止基準や荒天時の対応・緊急連絡先・保険等

【活動の催行及び中止基準】

- ・中止・延期に関する具体的な基準を設けます
- ・川の防災情報等や開催地域の関係者からの情報も参考にして、平常時の流況をもとに、時間経過による現場環境の変化予測を立て、催行中止または延期を決定します。
- ・気象庁から気象状況に関する警報・注意報が出されている場合には、原則催行中止または延期します。
- ・中止または延期及び実施場所変更の際には、関係各所・保護者へ通知します。

【荒天時の対応】

- ・荒天等で実施が中止となった場合に備え、延期日の設定や代替プログラムを準備します。関係各所・保護者への連絡（当日の衣服・持ち物の準備の有無）などの観点から、可能な限り荒天または荒天予想が判明した段階（遅くとも前日）で、中止や延期の周知をすることが求められます。

【緊急連絡先】

- ・基本の緊急連絡先一覧例は、別紙 2 の通りです。場所ごとに実施予定日に受け入れ可能な近隣の救急病院等を把握し、あらかじめ実施場所からの移動経路や時間を調べておきます。

【実施場所における管理組織等との調整に関する項目】

- ・実施場所の公共水面等が何らかの管理組合等によって規制されている場合には、予め利用計画等を連絡し、トラブル防止のためにローカルルール等の順守に努めます。

【保険の加入（内容把握）に関する事項】

- ・実施内容に応じた保険へ適宜加入します。また委託契約を結んでいるなど、外部団体側で加入する際には、保険内容の把握に努めます。

④活動毎の確認事項やセーフティ・トーク項目

基本的なセーフティ・トーク項目を示します。

【当日の朝】

- ☐ 水分補給に適した量の水分が水筒に入っているか
- ☐ 怪我をしているまたは体調が悪い園児がいた際の対応
- ☐ 適した服装、装備か確認する
- ☐ 出発前の点呼（誰が現地に行くのか。留守番する園児の有無など）

【現場での参加者の再把握】

- ☐ 参加者の所属（外部スタッフや保護者など担任以外の大人、在籍クラス）と人数
- ☐ 参加者の健康状況や参加時の体調等の把握と周知（体調に懸念事項があるこどもがいた場合の対応について等）
- ☐ 参加者の服装チェック

【活動内容（アクティビティ）の説明】

- ☐ アクティビティ・活動内容が複数の場合、その都度ひとつずつ伝えていく方が、幼児にとって次に行く活動が理解しやすく、安心感を持って活動に臨める。
- ☐ 指導者・スタッフ等の紹介

【危険箇所・危険な行為の周知・徹底】

- ☐ 危険な箇所・動植物について（事前の下見や当日の下見で得た情報等）・危険な行為について（流れの中では立たない等）
- ☐ 低体温症の危険と兆候の確認方法

【セルフレスキューの方法】

- ☐ 事前に参加する大人の間で共有・確認を行っておく。
- ☐ レスキュー・対処するのは大人のため、こどもたちに行う説明としては、「ライフジャケットを着よう」「おともだちが川に落ちた（流された）ら、早く教員か周りにいる大人に大声で伝えよう」等のシンプルかつ、即行動に移せる声かけが望ましい。（こうした声かけは心構えとして伝えるものであり、基本的には未然に防ぐための装備や体制等を講じておくことが大前提となる）
- ☐ 河川活動時の注意事項を事前に繰り返し伝えておくことで、事故発生時のスムーズな誘導に繋げる。ただし、活動に夢中になることで、滑って転倒や、川と陸地との境を超えてしまうなど注意・説明していても起こりうる怪我や事故は考えられる。そのため、河川活動を行う際は、通常よりも見守る大人の人数を多くするなどの体制は考慮すべきである。
- ☐ 基本的な漂流姿勢の説明
- ☐ 落水時の対処方法とあわせて、落水しないための予防的な説明が必要

□スローバックでの救助方法の説明、ロープの掴み方と姿勢

【各活動中】

□熱中症・低体温症状に気を付ける

□水分補給はしっかり行い、適宜休憩（川の中から上がるなど）する

□監視者は集中して全体の監視を行う

□活動に適した人数の保育者が、適切な位置に配置されているか

□動かないこどもや、不自然な動きをしているこどもがいないか注意して監視する

【各活動後】

□園児が全員集合しているか確認する

□体調の変化について様子を見る

⑤事故発生時の対応

□事故発生時は、運営母体や園の規定、現場責任者の判断に基づき、柔軟な対応を心がける。

□事故発生時には二次災害の防止に配慮した上で、レスキューの優先順位に基づき傷病者の救助及び安定化に努める。

□消防署、警察署など外部への要請を行う場合、活動を中止し他の参加者等の安全を確保する。

□事故発生時の時間経過及びスタッフの対応等を記憶し、可能な範囲でその記録を残すことに努める。

□救急隊への引き渡し後は救急搬送先の病院へスタッフ数名が付き添い、速やかに関係各所への連絡を行う。

⑥災害時の対応

□実施中に災害が発生した場合には、すべてのプログラムを直ちに中止し、「安全」「シンプル」「迅速」を確保できる適切な避難経路により安全な場所への誘導に努め、参加者の身の安全を確保する。

□災害により傷病者が発生した場合には、その環境及び状況下で最善な安全策を講じ、レスキュー隊への引き渡しまで傷病者の状態が悪化しないよう対応する。

□実施中以外に災害が発生した時には、各自の安全を確保しつつ、こどもの身を守ることを最優先とする。

□移動途中・活動時に被災した場合の避難場所をそれぞれ決めておき、事前に保護者へ周知しておく。無理に園へ戻ろうとせず、安全確保に努める。

【水や河川環境を活用した幼児教育プログラムに関する主な意見（幼児教育を支援する川の指導者からの声）】

-
- ・川に入る幼児向けのプログラムは指導者人数の確保が必要になり、ハードルは高めと感じる。幼稚園・保育園等の引率者が事前講習を受けたうえでサポートとして入ってもらえる様な関係作り・環境づくりが必要。
 - ・小規模でも、対象園と複数年に渡り活動を継続することで上記のような活動サポートも安定すること、効果測定もしやすくなると考える。
 - ・人口が集中する都市部では幼児が楽しく安全に川遊びを提供できる場所や提供できるプログラムが限られてしまう。結果、川の体験活動を選択肢にする園等は少ないと感じるものの、普段水辺に行く機会さえ少ない子どもが多いことを踏まえると、体験による変容は大きくなると思われる。
-

- ・まずは園側に活動内容を知ってもらうことや年齢に合わせた内容紹介が必要。施設の方がイメージしやすいようにスケジュール（当日の流れ、中止、延期、催行決定）、内容、持ち物、安全面など細かな打合せが大切だと思う。
 - ・生き物展示イベントなどは保育園（年少から）の要望が多い。天候不良で生き物観察が中止となり体験できなくなった園に出張カニ水族館を行ったことで、年少、年長クラスも生き物に触れ合う機会を作ることにもできた。フィールドにこだわる必要はないと感じた。
 - ・小学生とは違い長時間のプログラムは難しいかもしれない。
-

- ・年齢が低い子どもは、言葉が通じないこともあり指示が伝わりにくいことがあるので注意が必要。また、体重が軽いので足元が不安定で流されやすい。浮かぶ際に、バランスがとりにくかったり水中姿勢に乱れがあったりするので、すぐに立て直しができるような間隔でスタッフを配置する必要がある。
 - ・体験することはとても重要であるため「何をどのように体験させるか、その結果何ができるようになるのか」が大事だと感じている
 - ・川の活動は、夏場に限らず、救った魚を飼育したり、夏場に川で拾って来た小石に冬場に色を付けたり、思い出を絵や日記に表したり、川の活動の様子を創作劇にして発表したり…工夫次第で通年の活動にも広がると思う。学年が上がると、教科のねらいや専門性が強まり自由度が少なくなるので、体験そのものにねらいのある幼少期に体験し、その後、川や自然災害、環境問題、防災へと移行していくのがよいと考えている
-

- ・バス費用や、支援団体のスタッフ費用、事前学習費用も含めて予算が必要となり、助成金等を活用することもある。
-

- ・小学校よりも川の体験活動の導入が比較的容易な場合がある。川が近くにある施設の数も比較的多い。
 - ・幼児向けプログラムを作るだけでなく、地域の指導者が園の支援をしつつ、職員の意識も川に目を向けることで、継続的な活動に発展すると考えられる。
 - ・（猛暑対策として）朝に保育園の室内でライジャケを着用し、そのまま園バスに乗車し、活動場所に着いたらバス内で最低限の注意事項を説明し、降車したらそのまま川に入って活動した。活動後は濡れたままバスに乗って園に戻り、室内で着替えて終了。園バスを活用することで貴重な夏の一日を無駄にすることなく活動ができ、園にとっても支援団体双方にメリットがあった。
-

参考情報・サイト等

①気象・水位などに関する情報

…「気象情報」・「川の水位に関する情報」等の情報を確認することが重要です。

☐ 気象庁ウェブサイト

- ・気象庁が発表する防災情報、各種データ資料、地域の情報等様々なリアルタイムデータや過去の気象データ等を調べることができます。

<https://www.jma.go.jp/jma/index.html>

☐ 川の防災情報

- ・「川の防災情報」は、大雨などの際に、雨や川の水位の状況などを、インターネットを通じてリアルタイムに配信し、避難判断等に必要の情報を入手できるウェブサイトです。

<https://www.river.go.jp/>

②実際の川で活動をする際の安全確保に関する情報

…川および水際での活動において、ライフジャケットはいわば必須アイテムです。そのライフジャケット等の装備に関する内容や、知識・心構え等を含めた「実際の川で活動する際の安全管理」に関する情報をまとめています。

☐ 河川水難事故防止ポータルサイト（国土交通省）

- ・水辺の安全に関するコンテンツ検索や教職員向け授業教材など、様々なサイト・教材等を入手しやすくしたポータルサイトです。

<https://www.mlit.go.jp/river/kankyo/play/anzenriyou.html>

☐ 動画 リバーアドベンチャー ～川に魅せられしものたち～（国土交通省）

- ・水難事故防止のための RPG 風動画です。河川での自然体験活動の魅力や、具体的なリスクとその対処方法を紹介しています。（約 8 分）

<https://www.youtube.com/watch?v=IrIkZCm11l0>

☐ ミズベアソビガイド

- ・水辺の楽しみ方や安全対策などについてまとめた入門ガイド

<https://www.mlit.go.jp/river/kankyo/pdf/mizubeasobiguide.pdf>

□ **水辺の安全ハンドブック**

- ・川で活動する際のポイントや川遊びの魅力等を紹介

<https://www.kasen.or.jp/mizube/tabid129.html>

③**指導者・講習会**

…「指導者・講習会」等に関する情報をまとめています。

□ **NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会（通称：「RAC」）認定指導者資格・講座等**

- ・安全管理や基本的な技術指導など、川の指導者に必要な技術・知識を知るための基本科目が設けられた講座。認定ランクに応じて、引率ができる人数、活動内容、活動フィールドが広がります。

<https://rac-kawaiku.jp/>

□ **水難救助の国際資格「レスキュー3」講座等**

- ・アメリカ合衆国に本部を置く、急流救助活動に関わる民間団体の名称。コースの修了者には国際的資格であるレスキュー3の認定証が発行されます。

<http://www.srs-j.co.jp>

【別紙 1】

準備する資機材や装備等一覧（参考例）

※参考事例として、子ども及び保護者等が20～30名程度参加する活動（水中・水面での活動）を想定）を企画・催行する場合を想定しています。

No.	備品	数量	参加者	スタッフ	備考
1	ライフジャケット（大人用）	人数分	○	○	認定を受けた製品等、流水での活動に適したライフジャケットを用意する
2	ライフジャケット（子ども用）	人数分	○	-	
3	ヘルメット（大人）	人数分	○	○	流速や活動内容に合わせて用意
4	ヘルメット（子ども）	人数分	○	-	
5	スローバック	5	-	○	指導者のみ携行（取扱には技能が必要）
6	ファーストエイドキット	2	-	○	近くに無い場合は AED も
7	熱中症対策用用具	一式	-	○	
8	緊急連絡用携帯	2	-	○	
9	名簿	2	-	○	
10	速乾ウェア（上下）	人数分	○	○	参加者が各自で用意する
11	リバーシューズ等	人数分	○	○	
12	帽子	人数分	○	○	
13	タオル	人数分	○	○	
14	着替え（替えシューズ含む）	人数分	○	○	
15	飲み物	人数分	○	○	

※その他、各イベントに応じて必要な資機材を明記します。

※参加者が持参するものについては、事前に参加者への周知を行います。

【別紙 2】

緊急連絡体制表（例）

